

ナッジで促す キャップ回収の変革

「ついやりたくなる」仕掛けの実践と効果検証

小松巧武 / SON MYUNG CHUL / 杉崎桃香
梅田真誓 / 手塚聰一朗 / 平山凜々菜

現状の課題と分析

課題：義務感による分別の限界

「面倒」という心理障壁

学生にとってキャップの分離は「追加のコスト」であり、禁止や命令といった従来の警告文では、自発的な行動を引き出すことが困難になっています。

成果の不透明性

回収されたキャップが何に役立つか、自分たちの行動がどのような社会的価値を生んでいるのかが見えず、モチベーションが維持されにくい現状があります。

施策1：進化型アンケート

ナッジ・キットの貸出運用

独自の統計を取りたい学生やゼミにアンケートボックスを貸与。回収行動を「データ提供」という協力活動へリフレーミングします。

- 自己決定：興味ある問い合わせへの投票
- 社会的証明：他者の投票の可視化



運用モデル：役割分担と責任

担当者	役割・責任範囲	具体的なアクション
依頼者（学生・ゼミ）	統計ニーズの管理	問い合わせの設定、結果の集計・分析、報告
プロジェクトチーム	インフラ提供・支援	ボックスの貸出、設置調整、メンテナンス
一般学生	自発的参加	キャップによる投票（行動変容の主体）

施策2：大規模参加型アート

広域展開による「協力」の可視化

学食や中央ホールなど、視認性が高く広いスペースに巨大パネルを設置。ゴミ捨てを「アート制作へのクリエイティブな貢献」へと昇華させます。

複数のパネルを連結・分離可能にすることで、イベント規模に応じた拡張性を確保しました。



施策3：キャップ野球イベント



競技化・遊び

キャップを「資源」ではなく
「遊び道具」として再定義。
キャンパス内で魔球大会を開催。



バイラル効果

屋外の広い場所で実施し、通行人の注目を集めることで認知度を劇的に向上させます。



言語不問の交流

単純なルールが言語の壁を超えて、留学生との偶発的なコミュニケーション形成を促進。

施策4：賽栓箱（さいせんばこ）



文化的文脈の利用

日本人に馴染み深い「お祈りして投入する」という行動スクリプトを、キャップの「栓」とかけたユーモアと共に活用。

投入行為自体を儀式化することで、心理的な満足度を高め、思わず写真を撮りたくなるような「シェアしたくなるナッジ」を創出しました。

活動成果：自発的回収量の推移



エンターテインメント要素の導入後、回収量は前月比180%の成長を記録しました。

結論：行動を変える4つの要素

- ✓ **自己決定**：アンケートでの意思表示が、強制ではない自発的な行動の契機となった。
- ✓ **可視化**：大規模アート制作を通じて、個人の貢献が全体の一部となる実感を創出した。
- ✓ **体験**：野球というスポーツを通じ、キャップを「価値ある遊び道具」として再定義した。
- ✓ **文化的文脈**：賽栓箱によるユーモアが、既存の行動習慣を環境行動へシームレスに繋げた。

今後の展望： ナッジ・プラットフォーム

学内の多様なニーズと環境行動を繋ぐ、持続可能なインフラへ。

ご清聴ありがとうございました

皆様からのご質問・コメントをお待ちしております。

ナッジで促すペットボトルキャップ回収プロジェクトチーム一同

Image Sources



http://www.mygift.com/cdn/shop/products/71mKwZa2gsL._AC_SX679.jpg?v=1671667504

Source: www.mygift.com



<https://images.squarespace-cdn.com/content/v1/5d802538946ec4207ca6bcd7/12c38994-f640-440e-898a-4c927863ab71/Stand+with+Ukraine+Sunflower.jpg>

Source: www.kateolsenbirner.art



<https://i.ebayimg.com/images/g/P-0AAeSwBcdom9Xt/s-l1200.jpg>

Source: www.ebay.com